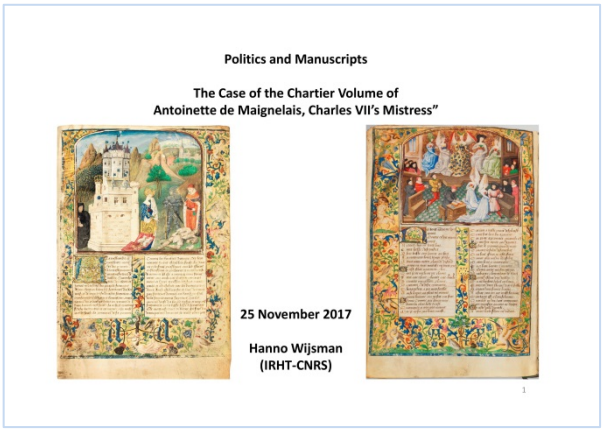
関西大学芸術学美術史研究学会 e ジャーナル

タイトル Title	王の愛妾のための散文、詩文、画像、アントワネット・ド・メニュレのために製作された 15 世紀のフランス写本
著者 Author(s)	フランス国立文献史研究所フランス国立科学研究センター(IRHT-CNRS) 教育技術員ハンノ・ウェイスマン/通訳・翻訳 西垣 江利子
刊行物名 Citation	関西大学芸術学美術史研究学会 e ジャーナル, 1
刊行年月 Issue Date	2019-3-31
本文言語 Language	日本語 Japanese
URI	http://www2.kansai-u.ac.jp/GEIBIOB/index2.html
資源タイプ Type	Journal Article
著者版フラグ Text version	Publisher

王の愛妾のための散文、詩文、画像、
アントワネット・ド・メニュレのために製作された 15 世紀のフランス写本

フランス国立文献史研究所 フランス国立科学研究センター（IRHT-CNRS）
教育技術員　ハンノ・ウェイスマン
通訳・翻訳　西垣 江利子

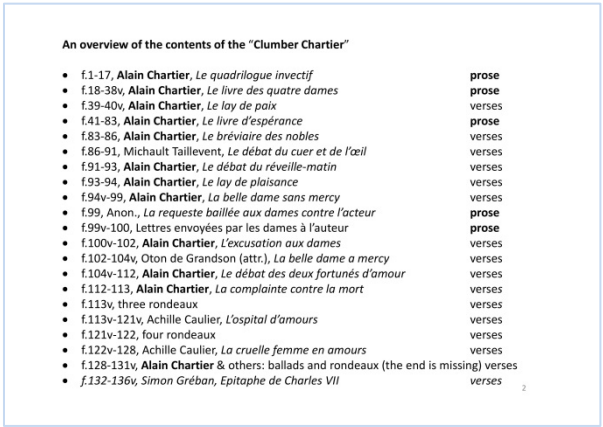
2017 年 11 月 25 日（土）
関西大学第 1 学舎 3 号館 AV-B 教室



本日は、皆様にお話しできることを光栄に思います。

また、お招き頂いた 蜷川 順子 教授に、心より感謝申し上げます。

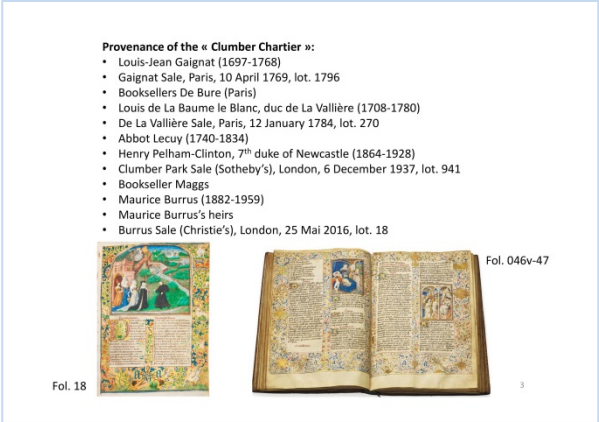
およそ 1 年半前の 2016 年 6 月に、約 80 年間、研究のために公にされていなかった壮麗な写本が売りに出されました。それは、1937 年のサザビーのオークションを最後に、表にでることはありませんでしたが、その時には、書籍商「マグス」の手に落ちました。この写本は、俗語であるフランス語の、散文や詩文のテキストの集成となっています。テキストの大半は、15 世紀の初めにアレン・シャルティエによって書かれたものですが、他に数名の作家も関わっています。



内容をひとつずつ扱うことはしませんが、ここに示す一覧から、その全体像を把握していただきたいと思います。

20 以上のテキストがあり、その半数以上がアレン・シャルティエによるものです。一方で、これらに直接関連するそれ以外のテキストもあります。非常に長いもの、例えば、42 フォリオ 84 ページからなる『希望の書』や 20 フォリオ 40 ページからなる『四貴女物語』がありますが、ほとんどがとても短く、1、2 ページ、もしくはほんの数行しかない詩文です。テキストのほとんどは詩文ですが、散文が五つあり、そのうちの 3 つは、写本冒頭にある、長いテキストです。

これがこの種の唯一のものというわけではなく、25 点を超えるよく似た写本が知られています。しかし、それらのうち 2 つと内容が同じものはなく、テキストが抜けているものや加えられているもの、配列が変わっているものもあります。しかしこの写本は、かなり例外的です。なぜなら、際立って豪華に装飾が施されているからです。頻繁に使用されていたため、少し傷んでいますが、なおもきわめて豪華な書物なので、これを皆様にお話ししたいと思います。



この写本の最近の来歴は、さまざまな販売カタログを通してかなり明らかになりました。18 世紀には、当時の二人のフランス人大コレクター、はじめにルイ・ジーン・ジェニャットのもとにあり、次に、書籍商デ・ビュアを経て、ラ・ヴァリエール公爵の手に渡ったことが知られています。19 世紀には、この写本は某修道院長レキュイのもとにあり、その後は数世代にわたって、英国のニューカッスル公爵コレクションに含まれていました。クランバー・パークにあった公爵の図書館が売却されたあと、この本を獲得したのが書籍商マグスだったのです。最近になってわかったのですが、そのすぐ後に愛書家のフランス人実業家モーリス・ビュルスがこの本を購入しています。彼は 1959 年に亡くなりましたが、家族が蔵書を管理し続け、2016 年になってはじめて売りに出されました。およそ 1 世紀の間、クランバー・パークの図書館にあったため、この写本はしばしば「クランバー・シャルティエ 本」と呼ばれています。

多くの余白の装飾の中に、エンブレムや紋章に関する情報が数多く組み込まれているにもかかわらず、制作当初の由来は完全には検証されていません。彩飾を施したのは、「デュノワの親方」と呼ばれる画家によると考えられています。その名前は、現在大英図書館に保管されている時祷書にちなむものです。かつてこの画家は、15 世紀初頭のパリにおける指導的な写本挿絵画家であった「ベドファドの画家」の最初の共同制作者とも呼ばれていました。

数多くの異本があるにもかかわらず、写本の大部分には、様式的にみて 1450 年代に制作されたと思われる均質性が見られます。しかし、写本末尾に変更箇所があります。完成から 10 年か 20 年後に、複数のフォリオが取り除かれ、別の写字家や装飾画家による 5 フォリオが加えられています。これについては後述します。

装飾にある手掛かりを解釈する場合に問題となるのは、すべてが重要であり、また曖昧でもありうる、ということです。そうであればこそ、興味深くもあり、また解釈も難しいのです。細部のすべてに触れることはできません。非常に複雑で豊かな装飾が施されているため、これに関する研究論文や研究書も、これから出版されると思われるからです。それでも、いくつかの重要な特徴をここで強調しておきましょう。

彩飾が施されたすべてのページに、「エー・アンド・エー」という二文字があります。これは、愛の絆、フランス語で「アン・ラック・ダモール」と呼ばれるロープで結ばれています。

「エー・アンド・エー」が付けられた、パンジーの花を咲かせている木が、七か所に見られます。花の数はさまざまですが、その木の周りに愛のロープが結ばれている例が多くあります。

「ヴィオラス」とも呼ばれるパンジーはあちこちにあり、余白装飾に、何百・何千と描かれていると思われます。ほとんどすべてのイニシャル文字から生えだしているのです。左にあるものや、右下にあるものをご覧ください。またテキスト・ページでも、他に装飾があろうとなかろうと、小さな盾型紋章の中に、パンジーが描かれています。（右上の部分と中央の部分をご覧ください）

パンジーという語は、フランス語の「パンセ」に由来するのでしょうか。フランス語のパンセは、「思い」と、この花とを、同時に意味します。特に見分けやすいこの花が、写本のいたるところ—余白や盾やイニシャルに描かれているということは重要で、その二重の意味を表していることに疑いの余地はありません。

パンジーの花は、二つの A の文字と同じく、挿絵の中にも見いだされることがあります。左側の挿絵の左の方に、パンジー模様のドレスを着た女性がいます。A の文字は、左にいる他の女性のうち二人の頭飾りに見られ、また右にいる寓意的な人物のドレスにも見られます。右側の挿絵でも、女性のドレスがパンジーで覆われているのがわかるでしょう。

もっとありますが、話を元に戻しましょう。こうした数多くのエンブレム的な記号は、誰かを言い表しているはずです。一体誰なのでしょうか。

愛のロープで結ばれた 2 つのイニシャルは、たいてい結婚しているカップルの名前の頭文字を示しています。例外があるかもしれませんが、後期中世の視覚文化における、かなり一般的なルールでした。15 世紀中頃のフランスにおいて、この種の写本を注文した上流階級に「エー・アンド・エー」のイニシャルをもつカップルは、それほど多くいません。私が見つけた可能性が高い夫妻は、アントワネット・ド・メニュレとアンドレ・ド・ヴィルキエールです。

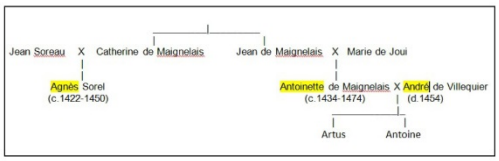
Portrait of King Charles VII
(by Jean Fouquet)

Portrait of Agnès Sorel as the Virgin Mary
(by Jean Fouquet)

10

シャルル 7 世は、父が亡くなった 1422 年にフランス王になりました。当時の状況はとても複雑でした。というのも、彼は戴冠できず、イギリス国王もフランスの王位継承権を主張していたからです。何年も戦争が続き、ジャンヌ・ダルクという有名な少女のおかげで、ようやくシャルル 7 世は最終的に戴冠することができました。彼は、亡くなる 1461 年まで王であり続けました。

シャルル 7 世には、アニェス・ソレルという有名な愛人がいて、彼女は「美夫人」と呼ばれていました。ジャン・フーケが描いたこの有名な右側の絵に、聖母マリアとして描かれています。



"de gueules à la bande d'or"

Antoinette de Maignelais (d. 1474)

"de gueules semé de billettes d'or, à la croix enhendée du même"

André de Villequier (d. 1454)

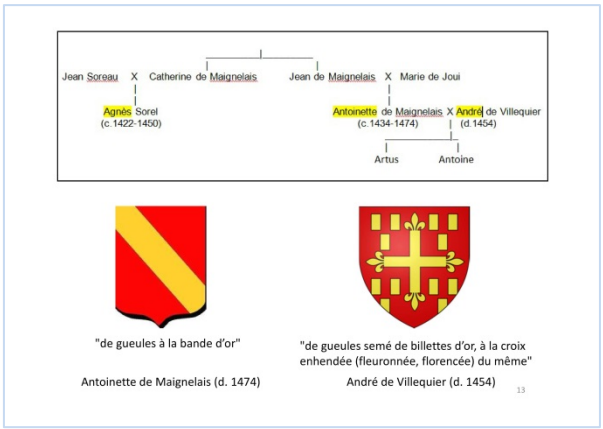
11

アニェスが 1450 年 2 月に早すぎる死を迎えたあと、シャルル 7 世は直ちに、彼女のいとこであるアントワネットを新たな愛人にしたということは、あまり知られていません。画面から、2 人の関係がわかるでしょう。アニェスの母とアントワネットの父は、きょうだいだったのです。この女性、アントワネット・ド・メニュレは、それなりの人物だったに違いありません。

1450 年 10 月に、王の側近アンドレ・ド・ヴィルキエールと結婚することで、宮廷での彼女の地位は保証されていました。夫が亡くなる以前から、公に王の愛人だったのか、それとも夫が亡くなってからのことだったかは、わかりません。しかし、夫婦ともに、王の信頼が篤かったことは、アントワネットとアンドレが受け取った多くの貴重な贈り物—宝石、土地、財産や称号が証明しています。しかし、アンドレは結婚して 4 年後の 1454 年に亡くなりました。その後、アントワネットは王の正式な愛人として、王が亡くなる 1461 年まで宮廷にとどまりました。

12

アンドレ・ド・ヴィルキエールは、フランス中部のオルレアン近郊にある 15 世紀の教会、クレリーの聖母礼拝堂に埋葬されています。礼拝堂の上にある部屋にはヴィルキエールの紋章が、暖炉の上に彫り出されています。残念ながら、ほとんどがフランス革命中に破壊されてしまいましたが、その名残りをまだ見ることができます。



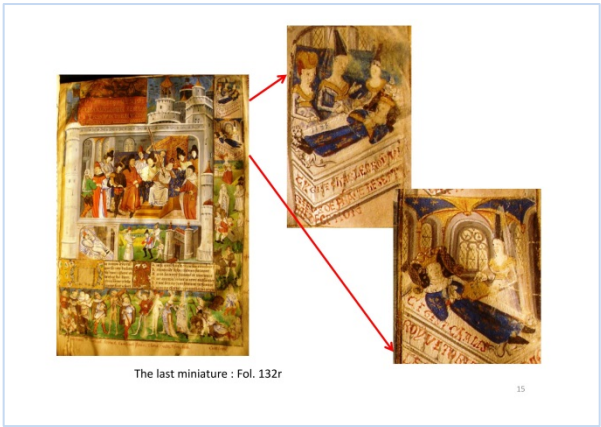
頭文字の A はたくさんあります。
・アントワネット
・夫アンドレ
・いとこのアニェス
・さらに、アントワネットとアンドレの 2 人の息子、アルトゥスとアントワーヌ

最後の部分から、アントワネットが強い女性であったことがわかります。息子のひとりは、アントワネットにちなんでアントワーヌと名付けられており、夫のアンドレにはちなんでいないということが、それを物語っているのです。彼女は、生涯 A の文字にこだわっていたと思われます。

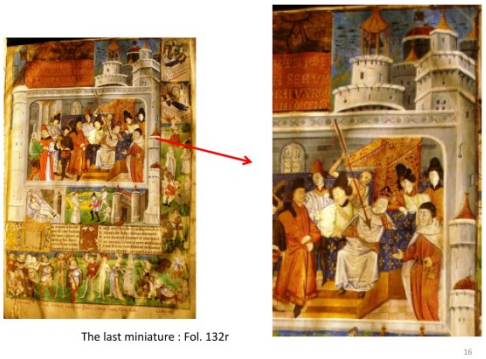
エンブレムの解釈において、私たちはよく仮説をたてます。解釈は、確実ではありません。しかし、これは、はじめからゲームの一部であるということを重視すべきです。エンブレムは多義的になるよう作られた暗号で、正確な意味はあいまいにされているものです。しかし、研究においては、私たちは可能な限り具体的に論じ、証拠を探す必要があります。資料ではどのように記されているのでしょうか。

アントワネットについて書かれた資料によると、彼女は、のちの人生で、ブリッタニー公フランシスにネックレスを贈っているのですが、会計簿にはそれが A の文字を組み合わせて作られていたと記されています。このことは、彼女が A の文字をエンブレムのように使用していた確かな証拠なのです。

ではなぜ、ブリッタニーのフランシスだったのでしょうか。それは、シャルル 7 世が 1461 年に亡くなるとすぐに、われらがアントワネットは、愛人としての人生を続けるために、ブリッタニーのフランシスの宮廷へ直ちに向かったからなのです。



そして、このことは写本においても確認できます。というのも、すでにお話ししたように、最後の数フォリオは、後から付け加えられたものです。それらは、シモン・グレバンによる、シャルル 7 世のエピタフを含んでいます。したがって、記念的な役割をもつこれら数フォリオは、1461 年のシャルル 7 世の死後に作られたに違いないのです。余白装飾の中に、王の死を悲しんでいるアントワネットらしき女性が見えます。実際には、3 人の女性がいて、墓碑に何かを記している女性、実際のエピタフ、すなわち銘板らしきものを差し出している女性が見えます。つまり、シャルル 7 世の死について記されているのです。しかし奇妙なことに、ブリッタニー家の紋章に関連するものが詰め込まれています。



挿絵には、王宮に死がやって来て、シャルル 7 世を矢で突き刺しているところが描かれています。

しかし、王宮の上の旗はフランスではなくブリッタニーのものです。見えづらいので、左上と右に拡大しています。そして、銀が腐食していますが、ブリッタニーの「アーミン」が見えます。

さらに、画面中央の、イニシャルの中の徹底的に消された部分にも、おそらくはブリッタニーのものが含まれていたのでしょう。

花と「エー・アンド・エー」の文字は残っています。ただし、ここではじめて、A の文字がひとつだけになります。この A は、2 つのコラムの間の余白に置かれています。右下に拡大したものを載せました。「エー・アンド・エー」は、ページ上部にあります。

下の 2 つの例にあるように、一対の A は、写本を通して同じ形をしています。

しかし、最後のフォリオでは、上の拡大画像のように、突然二つの A の形状に違いがあらわれます。二つ目の A はわかりやすい A ですが、一つ目の A は、「F」に形を変えられているように見えませんでしょうか。

ここでもまた解釈が止まらなくなりそうなので気をつけねばなりませんが、もう一つ、文字やエンブレムはあるのに、どうして紋章が無いのかについて述べます。先ほどアントワネットとその夫の紋章の、近代の複製図をお見せしましたが、写本にははっきりした紋章がありません。貴族たちは、所有している写本に、よくその紋章を入れていたにも関わらずです。しかし、こうしたことは珍しくなく、15 世紀の人々はゲームが好きで、記号や意味の「隠し絵遊び」をしたので、やはりどこかに隠された紋章があるのかもしれません。

注意深く見ると、写本の 4 枚のフォリオの余白に、小さな記号があります。赤地に様々なものを金色で描いたこれらの記号は、いずれも「エー・アンド・エー」の近くにあります。「エー・アンド・エー」のあるこの細部をご覧ください。1 つ目はかなり摩耗しています。下のほうに小さな赤いものが見えます。

フォリオ 18 の下の余白にもいくつか見られます。

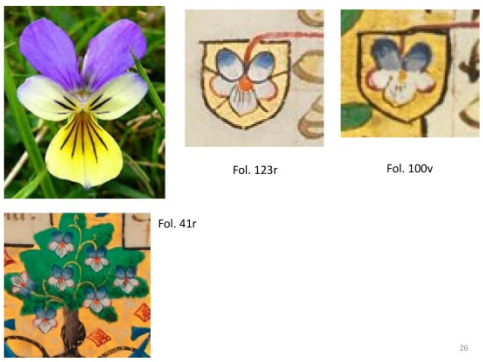
画面の下を見て、アントワネットとアンドレの紋章を思い出してください。いずれでも 2 色しか使われていません。赤地に金の図柄です。余白にあった小さな記号は、ほとんどが単なる装飾にしか見えませんが、まさに、この 2 色が使われています。

しかし、『希望の書』の冒頭に、アンドレ・デ・ヴィルキエールの紋章である「クロス・ペイタンス」と呼ばれる形にそっくりな記号もあります。

口絵を含む他の２つの例では、もし、青地に金で描かれているなら、明らかにフランス王家を指すはずの「フルール・ド・リ」がはっきりと見えます。しかし、ここでは赤地に金で描かれているため、直接王家には結びつきません。しかし、アントワネットの夫と、彼女がその愛人であった王との間で、形や色を用いて、ちょっとした遊びをしているように思えます。なお、アンドレの紋章にある「クロス・ペイタンス」の先端は「フルール・ド・リ」のような形をしています。

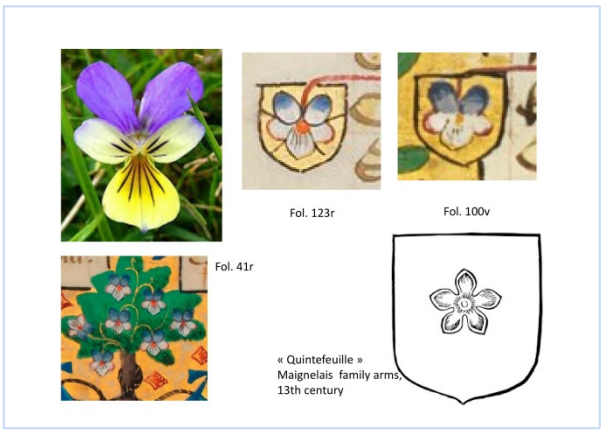
さらに掘り下げてみましょう。この小さな、ジェネットと思しき動物は、小さい赤と金の紋章のようなものに向かって舌を伸ばそうとしていませんか。背後の花々の左右の端にそれぞれパンジーがあります。残りの３つの花にも意味があるのかもしれません。この写本は、アントワネットのために作られたということをご納得いただければ幸いです。彼女の夫が 1454 年に無くなる前に作られたのかもしれません。

しかし、挿絵の服装は別の可能性を示しています。若い男性が履いている非常に短いスカートは、制作年が 1450 年代後半であることを示しています。実際、15 世紀半ばにスカートはどんどん短くなり、挿絵にあるようなタイプは 1450 年代後半に流行したものです。つまり、この写本は未亡人アントワネットのために作られたということになります。むしろ「シャルル 7 世の愛人アントワネットのために」というべきかもしれません。



よって、「パンジー」の花はアントワネットのエンブレムであるという結論になりますが、これを証明する証拠は見つかっていません。しかしこの考察は、以下の事柄とも辻褄が合います。

花には意味があります。フランス語の「パンセ」は「思い」を意味します。恋愛の文脈では、相手を思うことです。中世で良く知られていた古代ローマ時代の話に、パンジーはもともと白い花であったが、キューピッドが放った矢がたまたま当たり、紫色になったというものがあります。



古くからあるメニュレ家の紋章が五弁花であったことは、アントワネットにとってさらに特別な意味がありそうです。つまり、五弁花のパンジーにまつわる多くの意味の中に、彼女の家の歴史に関係するものがあるかもしれないのです。

お話ししたように、この写本が作られたのは、宮廷で生きた非常に魅力的な女性、年代記によると、美しいだけでなく大きな影響力をもっていた、王の愛人にして「お気に入り」だった女性のために作られたと考えられます。

このことが確認できたので、次に内容にも目を向けてみましょう。この本は、何について書かれたものでしょうか。

An overview of the contents of the "Clumber Chartier"

- f.1-17, Alain Chartier, *Le quadrilogue invectif* prose
- f.18-38v, Alain Chartier, *Le livre des quatre dames* prose
- f.39-40v, Alain Chartier, *Le lay de paix* verses
- f.41-83, Alain Chartier, *Le livre d'espérance* prose
- f.83-86, Alain Chartier, *Le bréviaire des nobles* verses
- f.86-91, Michault Taillevent, *Le débat du cuer et de l'œil* verses
- **f.91-93, Alain Chartier, *Le débat du réveille-matin*** **verses**
- f.93-94, Alain Chartier, *Le lay de plaisance* verses
- **f.94v-99, Alain Chartier, *La belle dame sans mercy*** **verses**
- **f.99, Anon., *La requeste baillée aux dames contre l'acteur*** **prose**
- **f.99v-100, Lettres envoyées par les dames à l'auteur** **prose**
- **f.100v-102, Alain Chartier, *L'excusation aux dames*** **verses**
- f.102-104v, Oton de Grandson (attr.), *La belle dame a mercy* verses
- f.104v-112, Alain Chartier, *Le débat des deux fortunés d'amour* verses
- **f.112-113, Alain Chartier, *La complainte contre la mort*** **verses**
- f.113v, three rondeaux verses
- **f.113v-121v, Achille Caulier, *L'ospital d'amours*** **verses**
- f.121v-122, four rondeaux verses
- **f.122v-128, Achille Caulier, *La cruelle femme en amours*** **verses**
- f.128-131v, Alain Chartier & others: ballads and rondeaux (the end is missing) verses
- f.132-136v, Simon Gréban, *Epitaphe de Charles VII* verses

29

この写本は、ひとりの女性のために作られた愛の詩集というだけではありません。中身の大部分を書いたアラン・シャルティエは、重要な政治的な文章も残しています。この写本は注意深く組み立てられたものなのです。赤字で示した愛の詩は、後半 44 葉からなる写本の、第二部を構成しています。そのあとは、のちに追加されたエピタフだけが続きます。青字で示している部分です。

赤で示した愛の詩のなかには、有名な物語『つれない姫君』からの引用が数多くあります。太字の行がそれです。他にもシャルティエらによる詩が含まれていて、中にはかなり短いものもあります。

しかし、写本冒頭の 3 つのテキストはすべて、アレン・シャルティエによる政治的な内容です。

「四人讒罵（ざんば）問答」は、1422 年のフランスの悲惨な状況の原因を記しています。百年戦争さなかでシャルル 6 世が没したこの年、イギリス王がフランス王位を主張したことによって、王太子シャルル 7 世は戴冠することができなかったのです。

「四貴女物語」は、1415 年、誉あるフランス軍が完敗した、アジャンクールでの悲惨な戦いでの、夫の運命を嘆く 4 人の女性について書かれています。

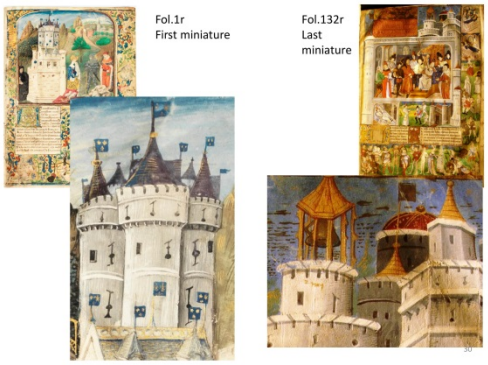
もっと短い「平和の道」は、百年戦争の終結と和解を強く訴える愛国的な詩です。

4 から 5 番目のテキストは、政治的というよりは道徳的です。

「希望の書」は、「理性」とも言える「悟性」が憂鬱によって苦しめられ、信念と希望がやってきて、それを救う、という寓話的なテキストです。政治的な背景はかなり明確で、フランス、特にシャルル 7 世に対して、困難を乗り越えよと強く訴えているのです。

「貴人日課書」は、紳士としてどのように振る舞うべきかの日々の教えです。このあとに続く愛の詩への橋渡しには理想的な文章です。

この写本が作られた 1450 年代には、百年戦争は終結し、国内情勢やフランス宮廷の状況も回復していました。しかし、これらの政治的な文章は、シャルル 7 世の治世のはじめからあった問題を思い起こさせます。もちろん、当時の平和への訴えは、より一般的な意味で読まれ、新しい文脈でも意味をもつようになりました。



この写本は、立ちならぶ塔に王家の紋章がたなびく、フランスを表す城から始まっています。そしてフランス王シャルル 7 世が亡くなろうとしている城で終わるのですが、それはブリッタニーを表しています。

こうしてこの写本は、アントワネットの人生を反映した、非常に個人的なものとなりました。彼女は、まずフランス宮廷の、そしてのちにはブリッタニー宮廷の「お気に入り」でした。しかしこの写本は政治的なものにもなりました。それは、これら二点の挿絵に、1422 年から 61 年というシャルル 7 世の統治した時期と、王の力がおよぶ範囲が示されているからです。シャルル 7 世は王国を制圧するために人生を費やしました。60 年代は、ブリッタニーはまだフランス王国に組み込まれていなかったのです。

この写本が発注された正確な時期とその事情については、明らかになっていません。アントワネットのような立場なら、プレゼントや、シャルル 7 世の注文だったかもしれません。実際にはわからず、あくまで可能性です。前述のとおり、挿絵に描かれた服装から判断すると、制作年は 50 年代後半である可能性がもっとも高いのです。したがって、アントワネットの夫であるアンドレへの微妙な関わりが認められるのは、彼がアントワネットのために注文したからと推測するよりも、むしろアントワネットが亡き夫を追悼するためのものであったと説明できます。

An overview of the contents of the "Clumber Chartier"

- f.1-17, Alain Chartier, *Le quadrilogue invectif* — prose
- f.18-38v, Alain Chartier, *Le livre des quatre dames* — prose
- f.39-40v, Alain Chartier, *Le lay de paix* — verses
- f.41-83, Alain Chartier, *Le livre d'espérance* — prose
- f.83-86, Alain Chartier, *Le bréviaire des nobles* — verses
- f.86-91, Michault Taillevent, *Le débat du cuer et de l'œil* — verses
- **f.91-93, Alain Chartier, *Le débat du réveille-matin*** — **verses**
- f.93-94, Alain Chartier, *Le lay de plaisance* — verses
- **f.94v-99, Alain Chartier, *La belle dame sans mercy*** — **verses**
- **f.99, Anon., *La requeste baillée aux dames contre l'acteur*** — **prose**
- **f.99v-100, Lettres envoyées par les dames à l'auteur** — **prose**
- **f.100v-102, Alain Chartier, *L'excusation aux dames*** — **verses**
- f.102-104v, Oton de Grandson (attr.), *La belle dame a mercy* — verses
- f.104v-112, Alain Chartier, *Le débat des deux fortunés d'amour* — verses
- **f.112-113, Alain Chartier, *La complainte contre la mort*** — **verses**
- f.113v, three rondeaux — verses
- **f.113v-121v, Achille Caulier, *L'ospital d'amours*** — **verses**
- f.121v-122, four rondeaux — verses
- **f.122v-128, Achille Caulier, *La cruelle femme en amours*** — **verses**
- f.128-131v, Alain Chartier & others: ballads and rondeaux (the end is missing) verses
- f.132-136v, Simon Gréban, *Epitaphe de Charles VII* — verses

この写本を彼女が自分のために注文したか、シャルル 7 世が彼女のために注文したか。いずれにせよ、ここで重要なことは、あとに続く愛の詩の前に、政治に関する文章を冒頭で目立たせていることです。強調しておきたいのは、これがさほど特別なことではないということです。前述のとおり、同じようにシャルティエの著作を集めた 15 世紀の写本は多く、実際、そのほとんどが政治的な文章から始まっているのです。この写本に特徴的なのは、政治的な文章の彩飾で、恋愛に関わる要素が強調されていることです。

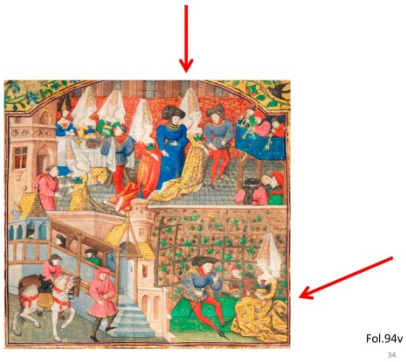
愛と政治がどのように混同して述べられているかを見てみましょう。写本の口絵には恋愛描写はありません。フランスの擬人化である寓意像があります。彼女は悲しみに嘆き、社会の３つの身分である聖職者、貴族、平民と対面しています。彩飾は政治的文章と愛の詩をつなぐだけにとどまりません。

左のフォリオ 1 にあるフランスを表す女性と、右のフォリオ 100 裏面の「愛の神」とを比べてみましょう。複雑な被り物をみればすぐに、両者が同一人物であることがわかります。これらの挿絵は、「愛」と「フランス」を同一視しているのです。さらに、「愛」は女性であることにお気づきかと思います。普通は愛の神は男性であり、写本の文章では「彼」とされています。しかし、挿絵では違っています。このことは、この写本の発注状況を考える上で重要なことです。

アントワネットは、宮廷で影響力のある女性でした。愛に関しても、政治に関してもそうでした。

「愛」は Amour（アモール）に関連する A の文字で覆われていますが、むろんアントワネットにも繋がります。ドレスや被り物による視覚的な演出において、アントワネットは愛になり、フランスになっているのです。

結論の前に、挿絵に関してもうひとつ申し上げます。



この写本には、パンジーや A の文字といったエンブレム的な要素を備えた女性が、三点の挿絵に描かれています。

フォリオ 9 4 裏面には、パンジー柄のドレスを着た女性がいます。彼女はシャルティエの『つれない姫君』の寓意的主人公「美しき姫君」です。

フォリオ 100 裏面の A の文字のドレスを着た女性が「愛」であることはすでに述べました。さらに、被り物に A の文字がある二人の女性とパンジーの柄のドレスの女性は法廷のメンバーで、著者が「あなた方の裁きの場へ」と述べています。

Fol.122v

36

フォリオ 122 裏面の「愛の法廷」では、左から 2 番目と一番右にいる二人の女性の被り物に A の文字があります。中央の「愛」には、パンジーも A の文字もありません。

An overview of the contents of the "Clumber Chartier"

- f.1-17, Alain Chartier, *Le quadrilogue invectif* prose
- f.18-38v, Alain Chartier, *Le livre des quatre dames* prose
- f.39-40v, Alain Chartier, *Le lay de paix* verses
- f.41-83, Alain Chartier, *Le livre d'espérance* prose
- f.83-86, Alain Chartier, *Le bréviaire des nobles* verses
- f.86-91, Michault Taillevent, *Le débat du cuer et de l'œil* verses
- f.91-93, Alain Chartier, *Le débat du réveille-matin* verses
- f.93-94, Alain Chartier, *Le lay de plaisance* verses
- **f.94v-99, Alain Chartier, *La belle dame sans mercy*** **verses**
- f.99, Anon., *La requeste baillée aux dames contre l'acteur* prose
- f.99v-100, Lettres envoyées par les dames à l'auteur prose
- **f.100v-102, Alain Chartier, *L'excusation aux dames*** **verses**
- f.102-104v, Oton de Grandson (attr.), *La belle dame a mercy* verses
- f.104v-112, Alain Chartier, *Le débat des deux fortunés d'amour* verses
- f.112-113, Alain Chartier, *La complainte contre la mort* verses
- f.113v, three rondeaux verses
- f.113v-121v, Achille Caulier, *L'ospital d'amours* verses
- f.121v-122, four rondeaux verses
- **f.122v-128, Achille Caulier, *La cruelle femme en amours*** **verses**
- f.128-131v, Alain Chartier & others: ballads and rondeaux (the end is missing) verses
- f.132-136v, Simon Gréban, *Epitaphe de Charles VII* verses

37

これら 3 つの挿絵は、『つれない姫君』のうち、重要な部分を描いたものです。1 枚目は『つれない姫君』のタイトル、2 枚目は女性の無慈悲さの訴えに対し女性を擁護する著者の弁明、3 枚目はアキル・コリエールによる文章「つれない姫君の訴訟手続きと有罪宣告」です。

挿絵の女性たちが演じる役割を見てみましょう。

Fol.94v

38

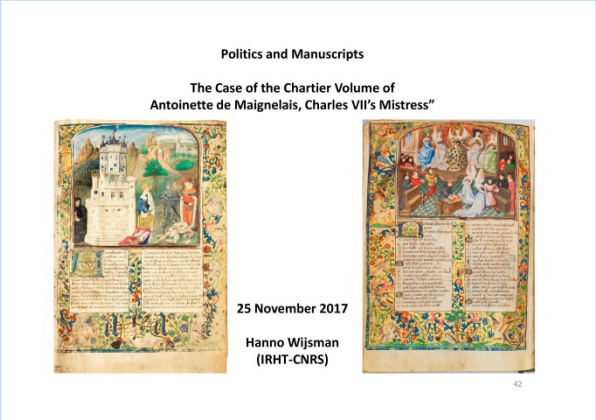
初めは、恋人を拒否したことをとがめられた女性「麗しき婦人」です。

Fol.100v

39

次に、この裁判で裁きをくだす「愛」の神と、ひざまずく著者から話を聴く傍聴人の女性も描かれています。

	3 枚目には証人が 2 人います。 包括的な答えを見つけるのは難しいですが、愛の事件における様々な役割を演じる女性がいて、この女性にはパンジーと A の文字が添えられています。アントワネットがあちこちに登場しているのです。
	二人いるうちの一人は彼女のいとこのアニェスではないかという人もいます。 以下は結論です。



この写本は細部描写や手掛かりが豊富にあるため、行き過ぎた仮説を立てないよう注意が必要です。それでも、以下のことを納得していただけたらと思います。

・この写本は、シャルル 7 世の愛人のアントワネット・ド・メニュレのために作られた可能性が非常に高く、「エー・アンド・エー」という文字は、彼女の夫アンドレ・ド・ヴィルキエールを表しています。写本の制作年代や内容全般から導かれるこの結論は、ゆるぎないものだと思われます。

・アントワネットは、文献資料では幾分隠れた存在ですが、長い期間にわたって宮廷で強い影響力があった人物としても書かれています。彼女が、シャルル 7 世の後継者であるルイ 11 世とあまり良い関係になかったブリッタニーのフランソワの下に移ったことは、十分に計画され、見事に実現された人生の一段階だったのです。愛人としてのキャリア形成と言っても良いでしょう。

・写本の最初の版と、最終版で追加されたエピタフは、構成的にうまく組み合わされており、アントワネットの役割に関して、愛の側面だけでなく、宮廷での幅広い影響力という側面を示しています。

前述のように、写本の冒頭は政治的道徳的な内容で、後半は愛の詩になっていますが、写本彩飾は、二つの部分の間にあって、両者を積極的につないでいます。

政治と愛をアントワネットにはっきりと関連付けています。

アントワネットは、たいした人物だったにちがいありません。周りの男性や人々、自分の人生、そして文字や記号を思うままに操ったのです。

ご清聴ありがとうございました。